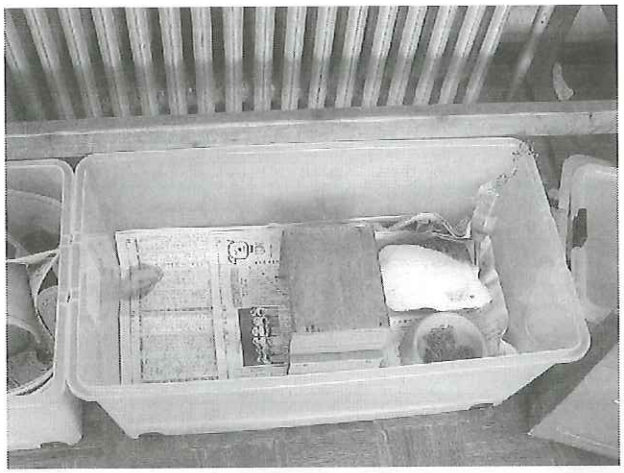
(4)　「教室内飼育の課題と成果」

筑波大学附属小学校教諭　　森田和良

みなさんこんにちは。筑波大学附属小学校の森田です。よろしくお願いいたします。

まず、こういう場に来ると、だいたい飼育がいい加減だと、学校は非難の的になります。先ほどの西東京市の小学校などは校長先生の理解があり、担任の先生方の理解があって、成立していると思うんですけれども、多くの学校はそれほど理解があるわけではありません。逆にいえば、邪魔者扱いされていることが多いわけです。ですから、桑原先生がご指摘のような現状があるわけです。しかし、そうすると必ず「学校の先生何しているんだ」。つまり、われわれが一生懸命教育をしているわけですけれども、それに対して、世間はまた非常に冷たい目で見ている。保護者は、「あんな学校には子どもをあずけられない」などと不安に思う方もいらっしゃいます。その原因を探ってみると、桑原先生ご指摘のように、私たちは、教育の細かいことについては大学で教わってきますが、学校飼育動物については全く教わっていない。そういう意味では、群馬大学などでは、本当にいい教育をされているんだな、と感じるわけです。しかし、われわれは、現実に教員としてすでに教壇に立って子どもたちを教えているわけです。なおかつ、赴任した学校に最初から飼育小屋がなくて、そして、自分たちがつくろうというならばそれなりの意義もあるし、それなりの熱意もあるんですけれども、行った学校にはすでに飼育小屋があるんですね。そして、大量のウサギがそこに飼われているわけです。そして、それを見ると、本当にみすぼらしい状態であったり、それから、自分で発言もしたことがあるんですが、死んだりすればそれは自然淘汰だと、偉そうなことを言って、自分たちの仕事を増やさないように、内心ではしていたわけです。そういうことが、教師の怠慢だと言われると、非常に心外なわけです。つまり、われわれは目の前にいる子どもたちを育てるわけです。だから、子どもたちだけで精一杯なんですね。そこにさらに新しいものを付加されるというのは、非常な負担感を感じるわけです。でも、この現代の世の中でやはり動物とのかかわりは非常に大事だと思います。そうするとどの大事さに意義を感じて、一生懸命やる先生が自ずと飼育当番になるわけです。この矛盾わかりますか？つまり、いい加減で無関心な先生は、「私はできない」と避けて通って、良心的な先生ばかりが負担を背負うわけです。場合によっては、夏休み毎日エサをやりに学校まで来ているなんていう先生もいるわけです。ところが、そんなふうに頑張っていても、病気になってしまう動物も出てきます。それを獣医師さんに持っていくと、「なんだこの育て方は」としかられて、「学校は何をやっているんだ」と言われるのです。だから、心ある先生がかわいそうだと思って、見るに見かねて病気の動物を持っていくと、獣医師さんにしかられちゃうわけです。しかも、治療費の出所がないわけですから、下手をするとその先生が自腹を切ることになります。精神的にも負担を抱え、金銭的にも負担を抱えている、こういう現状では本当に飼育が広がらないわけです。そういう意味で、この研究会のような形で立ち上げて、それを今度は行政の方にいい影響を与え、なおかつ、獣医師の方々にも学校の現状を知っていただくということで、少し、いろいろなことを紹介したいと思います。

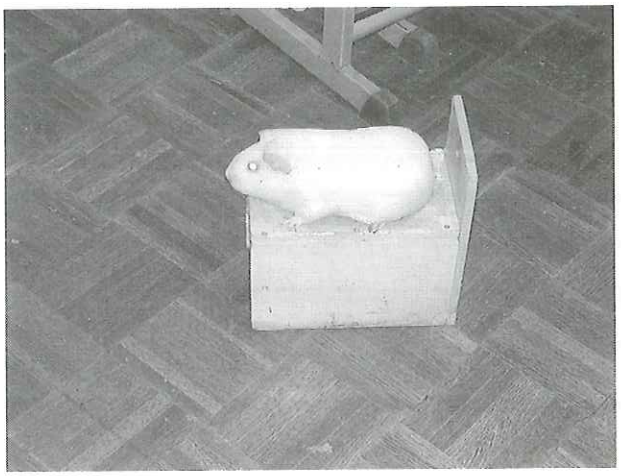
私は、教室で飼育をするという実践をしています。私の教室での飼育というのは、先ほど言ったように、学校で飼育小屋をつくって飼育するというのが、どうも責任が明確ではないとい



う感じがありまして、教室で飼育したいと思ったわけです。

この写真は、教室で（うちのクラスは４０人いますが）、１０人に１匹のモルモットを飼っています。それぞれ衣装ケースがあって、教室で勉強しながら、日常的に飼育をしているという状態です。当然給食の最中もいることになります。掃除の最中もいます。そして、朝と帰りに世話をするということになっています。このように真ん中に木の箱があるのは、これは子供が作ったんですけれども、モルモットが隠れやすいような場所をいろいろ工夫したり、モルモットが住みやすい環境を、いろいろ工夫して作っています。１日モルモットが生活をすると、帰りには新聞紙がぐちゃぐちゃになりますから、これらを子どもたちが片づけるわけです。そして、新しい水を与えて、新しいエサをあげます。これは２年生でしたけれども、制服が汚れるのもかまわず抱っこして、このように喜んでいます。だんだん慣れてくると、ああいうところに

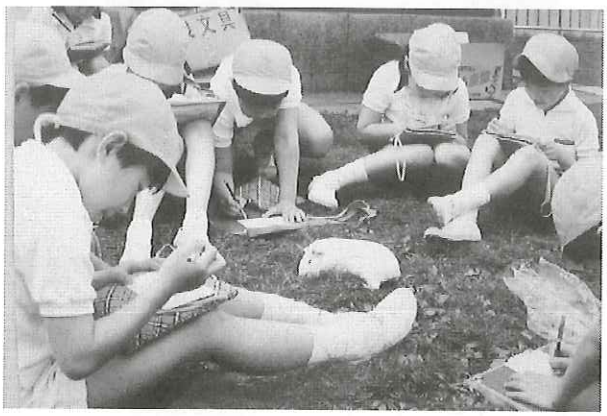
置いておいても、モルモットはじっとしています。抱っこしてなくてもいいんです。逃げたりはしません。逆に床に置いてしまうとどこかはじっこの方にいって、手の届かないようなとこ



ろに入っていってしまいます。このようなことも、子どもたちはだんだん気づいていって、日頃の飼育がうまくいくと、そんなに時間はかからず、いろいろなことに気づくようになります。今は素手で世話をしていますが、最初の頃は汚いというイメージがありますので、ゴム手袋を用意して世話していました。しかし、１か月もすると、素手でやった方が早いということに気づき、ゴム手袋などは誰も使わなくなりました。月曜日から金曜日までは、このように教室で飼っているわけですが、土日が問題になります。

この写真でＤと書いてあるのは、Ｄグループの持ち帰りようのケージです。このような容器にモルモットを入れて、子どもたちは東京都内いろいろなところから来ていますので、だいたい１時間かけて連れて帰ります。ランドセルを背負って、片方にモルモット、片方には飼育用のエサなどを持ち、両手に荷物を抱えて帰るわけです。

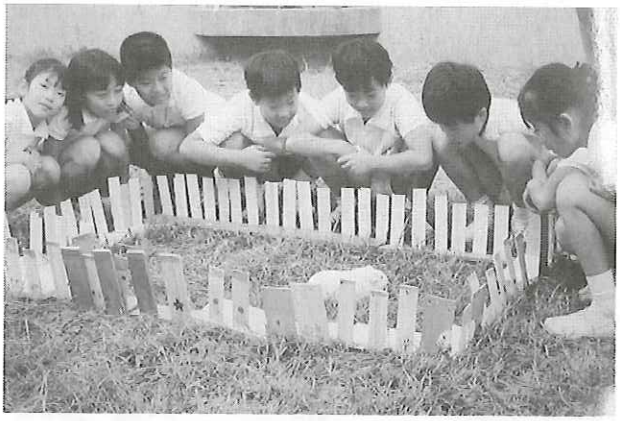
ちょっと後ろにいる子で、青いケースを持っている子がいますが、あのケースにはムシが入っています。たまたま、３年生くらいになるとムシの勉強もしていて、「モルモットを持ち帰るなら、ムシも持ち帰ろう」ということで、秋にムシを捕ったものが、翌年の１月まで生きたということもありました。すまり、動物を飼えばムシだって同じだろうという意識が芽生えてきて、理科の授業でも、そうやって持ち帰るということをやっています。普通ムシなどは、１週間で死んでしまいます。１週間というのは、必ず土日に死ぬんです。世話しないで水をあげませんから。ですから、ムシも死んでしまう。それは、ムシの寿命だろうと、子どもたちは勝手に決めつけるわけです。でも実際に私の学級で育てていたら、ムシだって、翌年の１月まで生きていましたから、きちんと世話をすれば、当然死んでしまうムシですが、長く生きさせることができたのは、子どもたちが一生懸命やってくれた成果だと思っています。



だんだん飼育が慣れてくれば、この写真のように自由に抱っこしたり、いろいろなかかわりをもったり、スケッチをしたりいろいろなことをして子どもたちがモルモットとのかかわりを深めていきます。

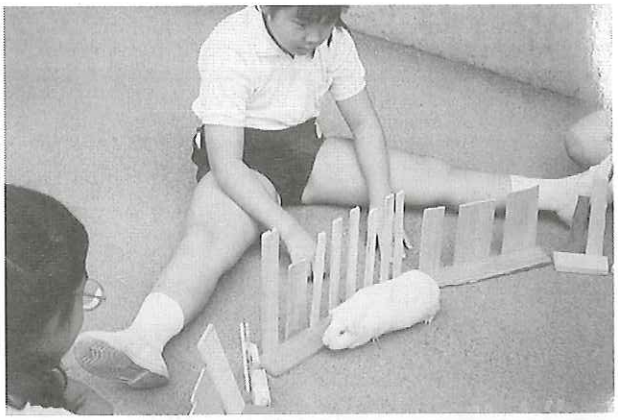
私の学校では、クラス替えが３年生と４年生の間に１回あります。３年間持ち上がりということになります。そのような中で、３年生になると、学級の解体とともに、このモルモットをどうするかということが話題になります。先ほどの学校やいろいろな事例では、モルモットを他学年に渡すことをしていますが、私のクラスでは、ほかの児童には渡しませんでした。このことはあとで詳しく説明します。

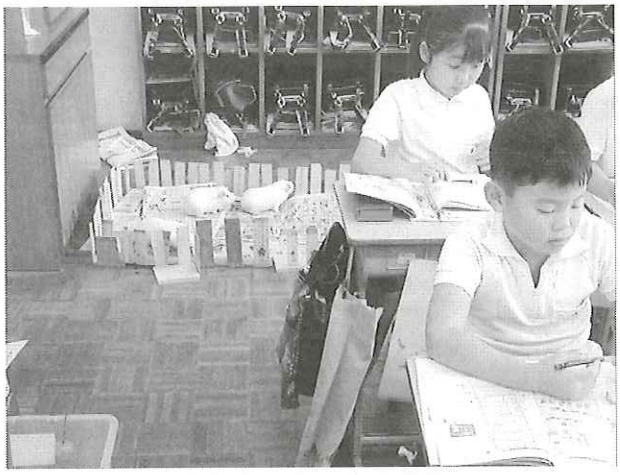
今やっている活動についてお話ししたいと思います。実は、モルモットがどんどんエサを食べるものですから、最初５００ｇくらいの体重が、このころには１ｋｇを越えてしまって、知らない人が見たら「ウサギですか？」というくらいまで太ってしまったんです。これではいけない、どうし



よう、ということで、ダイエット用に運動させるために柵を作っています。このように草むらに放して逃げられないように柵をすれば、モルモットはダイエットしてくれるだろうと、つまり、運動するだろうと思ったわけです。ところが、少しも運動しませんでした。草むらに置くと、草を食べてしまって、ダイエットの効果が少しもないということがわかりました。そこで、子どもたちは場所を移動させたわけです。どこへ移動させたかというと、草の生えていない、アスファルトのところです。そこに移動させれば運動するだろうと思ったんですが、これも運動しないんです。結構ア

スファルトは熱いんですね。ですから、彼らもじっとしているわけです。だから、この方法でも、ちっとも運動しない。これは一応、総合的な学習の時間の授業中にやっているんですが、子どもたちは、モルモットが動かないのをただじっと見ているだけの授業になってしまいました。これではあまり学習効果がないなと思いまして、この作戦はだめだと反省しました。





そこで、授業時間を使わないで、モルモットが運動できる方法を考えようということで、いろいろアイデアを出した結果、普段の授業中に運動させればいいということで、教室の中で行いました。ここにはエサがありませんので、彼らは太ることはありません。でも、1匹では運動しないんです。はじっこの方にじっとしているだけなんです。そこで、教室の端に柵を作って、4匹入れました。4匹入れると運動するようになるんです。どんどん追いかけ回したりして、非常に運動よくするようになりまして、約1か月くらいで200gの減量に成功しました。このように新聞紙をひいて、朝から放課後までこうしているわけです。すると時々脱走したりして、足下に来たりするんですけれども、子どもたちは喜んじゃうんです。算数の勉強中でもニコニコしたりしています。それじゃだめだということで、足下に来ても気にしないようにしなさいと指導しまして、来てもいないふりをしなさいと言いましたら、だんだん我慢できるようになりまして、勉強に集中できるようになりました。そして4時間目になったら掃除をするわけです。給食もありますので、あまり汚いのでは困りますから。

ということをやりながら、いよいよ3年生の終わりになって、せっかく飼っていたモルモットを何とか自分たちの記念に残したいと言い出しました。そこで、このグループは、モルモットの模型を作ろうということで、発泡スチロールを台にしながら、その上に桐の粉（ひな人形の原料）を取り寄せて、それを用いて、実物大のモルモットの模型を、今作っているところです。これは、カチンカチンになりまして、ひな人形が2，3百年もつように、これも、落としてもそんなに簡単に割れるものではありません。ただ、木の粉ですから、茶色っぽい色をしていますので、この上から白の絵の具（アクリル絵の具）で色を着けて、モルモットのようにして、自分がイメージしているモルモットを作品として仕上げていきました。10人に1匹ですから、これを誰か1人がもらえることになるわけです。残りの9人はもらえないんです。したがって、もらえないということを考えれば、自分でレプリカのような形で残しておきたいとい